無償性を描くフランソワーズ・サガンの文学

周 貴子†

The literature of Françoise Sagan based on gratuitousness

Atsuko Shu

1. はじめに

フランソワーズ・サガン（1935-2004）の諸作品には，主要登場人物の心的特徴に強い近似性が確認される。それについては作者自身が，「わたしの主人公たちを結びつけているのは，無償性の感覚だ。かれらは皆，無償性の感覚を少しばかり持っている」という解釈を与えた[1]。このような言及がなされたのは，小説第一作の発表から10年ほど経った時期のことになるが，そこに至るまでの作品に「無償性」という言葉が使われたことは一度もなく，また以降の作品についても，この概念がことさらに際立つ形で描き出されることはなかった。

この「無償性gratuité」，あるいは「無償gratuit」という概念は，20世紀フランス文学において，ジッドやプルースト，あるいはサルトルらによって取り上げられ，多くの議論を立ち上げた重要テーマである。また用語自体には複数の語義があり，「利益の発生しないこと」や，「理由や根拠を持たないこと」など，使用されるコンテクストによって異なる意味を表す。サガンは先達作家の問いを受け継ぎながらも，「無償性」を人間の持つ感受能力としての「感覚sens」に結びつけたことにより，この概念に関する新しい解釈を提示した可能性があると考えられる。

「わたしは，ある心性を持つ人間を本から本へ連れていき，同じ概念に沿って書き続けます[2]」とサガンは述べている。先行研究によって，サガン文学における重要テーマはこれまで多く導き出されてはいるものの，諸作品に「同じ概念」が通底していることに関する考察は，未だ見られない。そこで「無償性」を基盤に置き，既出のテーマの数々を再観察してみたところ，すべてが驚くほど有機的に結びつくことに気づかされたのである。

このような背景のもと，筆者の修士論文では「無償性」の概念を通じて作品の諸相を分析し，いくつかの考察を行った。本短報では，なかでもとりわけ重要な発見であったと思われる，「無償性の感覚[3]」をそなえた人間の具体像が非順応主義者としての特徴を示しているという発見の報告と，おもにサルトルの実存主義思想に扱われた哲学的概念としての「無償性」が，サガンのもとでは異なる解釈を得ているのではないかという内容を紹介したい。この二項目をもって，「無償性」を基盤とするサガン小説の特徴が，まずは把握されるであろう。

2. 初期作品に描かれた非順応主義者たち

サガンの最初期二作品『悲しみよこんにちは（1954）』と『ある微笑（1956）』は，年若いヒロイン自身が語り手となり，過去の出来事を物語る回想形式の小説である。一人称単独視点の形式は以後の作品にほぼ採用されておらず，それゆえこの二作品には，「無償性の感覚」を備えた人間の姿が，もっともプリミティヴな表現で描き出されていると思われる。サガン作品に高い評価を与えた作家モーリヤックは，そのヒロイン像を「自省せる青春のもっとも真実なイメージ」と評しつつも，そこに理解し難い精神の混乱が提示されていることを，とりわけ強調した[4]。たんなる青春期の特徴として看過することを許されなかったこの「精神の混乱」が，もし「無償性の感覚」によって引き起こされたものだとするなら，それは具体的にどのような特徴を示し，他のどのような言葉によって説明できるのだろうか。

2.1 可塑性に特徴づけられる心性

二作品の主人公はいずれもきわめて内省的であり，明晰なまなざしで世界と自己の観察を行うが，そこに語られるのは社会に存在する自己の姿と内面（自我）との不一致である。主人公は社会の秩序や画一主義的な慣習に対し，たしかな抵抗感を抱いている。しかしその感情が透徹した反抗的態度を作り出すというようなことはなく，ヒロインは相対的な人間関係においてむしろ大いに迷い混乱し，他者に対して従順と忌避の矛盾した反応を繰り広げる。

とりわけ顕著に認められるのは，明晰な思考に反して示される，生への虚無的な姿勢である。モーリヤックをして「最悪の無秩序」と言わしめたこのような心性は，語り手自身によって「わたしは変形自在な粘土pâteでしかなかっ

†2023年度修了（人文学プログラム）

た[5]」と説明されるが，この«pâte»は別の箇所で«malléable»と言い直されており，その可塑性，可鍛性が強調される。

つまり主人公は柔軟に形を変えることによって人生の「鋳型[6]」から逃れているわけであるが，そこで退けられるのは，画一的な社会の価値観そのものと言うより，主義を持つことによって精神の自由が奪われてしまうことである。「自分はなんでもないJe ne suis rien.」と考え，つねに自己を無価値の状態に戻そうとする主人公には，「非順応主義者non-conformiste」の心性が描き出されているのである。

2.2 コジェーヴが読み解いたサガン——「新しい最後の世界」の開示者

そのような捉え難い複雑性を心的傾向に示すいっぽうで，主人公の性愛面における姿はじつに明快である。若い娘が自己の性的欲望を認め，身体を迷いなく解放する。サガン作品に描かれる，こういった性の様相に哲学的観点から解釈を与えたのが，アレクサンドル・コジェーヴである。コジェーヴは，サガン初期二作品を対象にした哲学論考「新しい最後の世界[7]」を発表し，この若き女性作家が小説世界に開示した様相をもって，ヘーゲルの「歴史の終焉」の議論に新しい解釈が付与されると提言した。

「歴史の終焉」に関するコジェーヴの既出の解釈では，哲学者（問いを投げかける者）の消滅と，人間の動物化（大衆化・無化）によって「hommeの消滅した世界」が確認され，歴史は終わると結論づけられたが，その理論には女性の存在が等閑視されており，未解決の問題として指摘されてきた経緯がある。コジェーヴはサガン作品を用いることによって，「hommes=人間」とした従来の解釈を「hommes=男性」に訂正し，ポスト歴史の特徴が「男らしさvirilitéの消滅」にあるという再定義に帰着させたわけである。

コジェーヴは，サガンの小説世界に開示される「新しい世界」の特徴を大きく二点挙げている。その第一の特徴は，男女の視線の逆転である。ヘーゲル哲学における「主人と奴隷の関係」と同様，男と娘（捕獲される前の女性）のあいだには欲望と承認のプロセスが発生するが，娘たちは，もはや男たちから「眺められる」受け身の存在ではなく，「眺める者」へと変化しているということである。そして第二の特徴は，娘たちの示す勇気と知性である。とりわけ知性については，主人公の内的独白の聡明さによって開示されるが，これは「hommeの消滅した世界」において「問いを投げかける者」がなおも存在することを証明している。この第二の特徴をさらに掘り下げることが許されるなら，娘たちの行う知性の労働は，人間が無化（動物化）されていないことを証明するにとどまらず，ヘーゲルのもとで「必要性besoin」であったロゴスを，「快楽plaisir」にまで置き換えているということもできるだろう[8]。

2.3 マージナルな生者たち

しかし，ここで注意を必要とするのは，コジェーヴの理論においては，「女性」の「若さ」が不可欠条件となっていることである。「この書物は青春のもっとも真実なイメージをわれわれに提示している」と評したモーリヤックもまた，「若さ」に作品解釈の起点を置いたが，はたして主人公に確認される社会通念との不調和や，可塑性を示す心性，非順応主義的態度は，青春期のリミナリティにおける一時的な現象なのであろうか。

そのような疑問のもと，論考の対象は，主人公らが「自己と同種類の人間」と見做し，深い愛情を抱く人物たちに移される。それぞれ，『悲しみよこんにちは』のセシルにとっては父親，『ある微笑』のドミニクにとっては不義の相手となる。

この「中年」・「男性」たちが示す心性構造は，社会的性性への忌避や，道徳的な愛への無関心などを要素に持つ。彼らは生活面において，家長権をふるうことはなく，むしろその責任から逃れようとする。社会的存在としての「男」という意味では役立たずの彼らは，画一主義的社会の「廃棄物」となる運命にあることが予言され，その異端性が主人公より顕著に描き出されている。作者は性別や年齢を前提条件としない生来的な心性，ある種の人間たちの存在を証明しようとしているのだと言える。

また拙論では，このような心性を「非順応主義者」として定義づけたが，本解釈の正当性は作者の他作品の叙述によって立証することが可能となるであろう[9]。サガンの描く非順応主義者たちは，社会通念と自己のあいだに不調和を示しながらも，不確かで相対的な世界にとどまったまま，その生を肯定しようと努めるのである。

3. 実存を問う無償性

1965年に発表された第六作『ラ・シャマード[10]』は，サガンが「無償性」という言葉を小説に用いた最初の例となる。自由と経済の問題をめぐり自己存在が問われるこの作品には，サルトルの実存主義思想の影響が色濃く感じられる。そこでサルトルの長篇小説『自由への道』の第一部「分別ざかり（1945）」を比較対象に用い，サガンのエクリチュールにおける「無償性」を哲学思想の側面から検討した。

「無償性」はサルトルの哲学思想において「自由の精神」を支える重要概念であり，サルトルに深く傾倒していたサガンが，その理論を知らずにいたとは考え難い。また，両作品はともに20世紀中頃のフランスにおける闇中絶を語った稀少な小説であり，その共通項も注目に値する。

しかしながら『ラ・シャマード』はサルトルとの関連性を容易に確認できるようには書かれておらず，むしろサガンは物語の転機となる重要な場面でフォークナーの『野生の棕櫚（1939）』を引用し，主人公女性の精神的導き手としての役割を担わせている。そして『自由への道』は，フォークナーの強い影響のもとに書かれた作品なのである。

この隠されたトライアングル構造に着目し，作品分析を行ったことによって，サガンによる「無償性」にどのような独自性が発見されることになったのだろうか。

3.1 まなざしからの解放，世間的体裁の手放し

『ラ・シャマード』の主人公は，自己の存在価値を放棄した人間として物語に登場する。先に確認した非順応主義的心性は本作品にも引き継がれているのだが，主人公は予期せぬ恋愛を契機に順応主義的姿勢を受け入れる。作品名«La Chamade»には，自らの精神を明け渡し，従順な愛と労働を引き受ける主人公の姿が象徴されている[11]。

作品の中核を成しているのは，他者（恋人）のまなざしによって他有化され，自己の感情を支配される主人公の苦悩であるが，その窮地は二度にわたりフォークナーによって解放される。作中引用される『野生の棕櫚』のくだりには，「世間的体裁respectabilitéの手放し」と，「食べ，肉体の交わりをし，眠る」という現存在への回帰が訴えられており，主人公はそれを自己へ届けられた個別のメッセージとして捉え，望まぬ労働生活から自己を救済する決意を固めるのである。しかし，そもそもこの「世間的体裁」とは，サルトルの論じた「対他存在」が生み出す想念に等しいと言えるのではなかろうか。サガンが描いた主人公の行動は，まさに全面的な無償性（あるがままの自己）を取り戻そうとする試みに他ならず，サルトル的無償性（自由な存在の自由な可能性）の議論が異なる角度から論じられているのだという結論に我々を至らしめるのである。

3.2 正当化されない堕胎行為

主人公が取り戻した自由はしかし，妊娠の発覚によって振り出しに戻される。世間的体裁に経済（金銭）問題が相乗して，「無償性」は究極の状況で問い直されるのである。『ラ・シャマード』と「分別ざかり」のなかで行われようとする堕胎は，いずれも「自由」の問題が唯一の理由とされている。エゴイズムと道徳が，シンプルな対立項として立ち上げられるのだ。

「分別ざかり」の主人公は，自己弁護によって堕胎を正当化させようとする。そこに語られるのは，こどもの小さな「まなざし」についてである。親を見つめる「我が子のまなざし」によって，己の人生は永遠に無償性の感情（対自）を失ってしまう，というのである。またサルトルは，この「まなざし」の向きを母体（主人公の恋人）のもとで逆転させ，自らの内に宿った運のない命を哀れみながらも，母性を押し殺そうと努める女性の心情を描いている。

しかしサガンのほうでは，そういった自己弁護や，通念的な女性性が描かれることはない。主人公は「わたしは何も所有したくない」と述べるのみで，わずかな迷いを示すこともないまま，堕胎を敢行するのである[12]。

> 彼女の中にあるのは恥ずべき弱さではなく，むしろ，深いところに隠された動物的な力が，当たり前のように彼女を人生から遠ざけるのだ[13]。

三人称の語り手により，自己本位的な中絶行為はエゴイズムから切り離される。しかし同時に，母性はおろか，胎児の生命にほとんど意識を向けることなく，その存在を消してしまう主人公の姿には，いささかの正当性も与えられてはいない。社会におよそ利益をもたらさない人間の，本質的な無償性が晒されるのみなのである。

いずれにせよ，両作品が共に，道徳的に正当化されない堕胎を描き出したことの意味は大きいと言える。現代社会に組み込まれた画一主義的な性愛の形について[14]，あるいは子を生む・生まないことの根源的な自由について [15]の問題が，圧倒的なリアリティを伴って世に問われたのであるから。

3.3 実存主義から締め出されるサガンの「無償性」

「主体的実存」の探究を，妊娠問題を題材にして描き出そうとしたサルトルの試みは，フォークナーに共通するものがある。『野生の棕櫚』の男性主人公もまた人妻との逃避行の途路において妊娠問題に直面し，「金と世間的体裁の両方」との戦いに挑んでいるが，そこに掲げられるのは「抽象的・個我的な愛の理想の実現[16]」である。両作者にとって，「行動」は現在の下劣さを乗り越え，自己の存在を上昇させるための手段であり，自由（主体的実存）と離れがたく結びつく。

いっぽうサガンのもとで描かれる「行動」は，状況からの自己解放が唯一の目的となる。行動が自由への希求と強く結びついているのは同じであるとしても，それは生理的欲求にしたがって行動する動物的な自由であるゆえ，獲得した自由のなかに無為は担保されていなければならない。

> 行動は生でなく，いくばくかの力を無駄づかいするやり方，苛立ちだ[17]。

上記は『ラ・シャマード』に用いられた章頭エピグラフ（ランボーの詩の一節）であるが，この引用によって浮き彫りにされるサガンの思想とは，自己実現を果たさんとするサルトル的「行動」こそが，「無償性」を危うくするということである。物語の終盤近くには，「彼女（主人公）は，自分が実存という用語に値するすべてのものから永久に締め出されたことを知っていた[18]」という語りが置かれている。「無償性」の概念をめぐり，サガンの描こうとする人間は，サルトル思想の外側に存在することが，ここに宣言されているのである。

4. おわりに

冒頭で述べた通り，サガンは「無償性」を，人間の感受機能である「感覚sens」に宿る，ある種の生来的能力のようなものだと解釈している。したがってサガンによる「無

償性」とは，意識的行為によって試されるものでもなければ，自己の存在を上昇させるために備えておくべきものでもなく，ただその持ち主の心性や行動を運命づけるのみなのである。作品には「無償性」に関する新しい哲学的解釈が提示されていると言ってもよい。

サガンの小説は，その登場人物たちにも似て，外見的には明確な理論を示さず，ときに通俗性がおおいに強調される。その文学的核心は，じつに見え難いのだ。サガン研究に未だ扱われた例のない「無償性」の概念を基盤に置き，その文学性を論じようとする試みには，今後もさまざまな課題が与えられることだろう。しかしそこに大きな可能性が秘められていることもまた，確かなのである。

注釈

[1] Françoise Sagan, *Tout le monde est infidèle*, avec André Halimi, Le Cherche midi, 2009, p.104.

[2] «I lead a character from book to book, I continue along with the same ideas.» Malcolm Cowley, *Writers at Work -The Paris Review Interviews I*, Penguin Books, 1958, p.308.

[3] le sens de la gratuité

[4] フランソワ・モーリヤック『日記Ⅱ 1952-1957』村上光彦・山崎庸一郎訳 みすず書房 1961年 p.31.

[5] Françoise Sagan, *Bonjour tristesse, Œuvres*, p.27.

[6]「鋳型を拒否する自由はある」*Œuvres*, p.27.

[7] Alexandre Kojève, *«Le dernier monde nouveau Françoise Sagan», Critique*, 10e année, no 111-112, août-septembre 1956, p.702-708.

[8]「わたしは，アムールがこの身にもたらす とても実質的な肉体の快楽のほかに，そのことについて思考するという，ある種の知的な快楽を知った」*Bonjour tristesse, Œuvres*, p.48.

[9] 例えば代表作のひとつ『乱れたベッド』(1977)には，次のような叙述がある。「事実，反順応主義を主張しながらあまりに道徳的で口やかましく，おおいに順応主義的なこの時代にあって，彼女（主人公）は自身の下劣な行為を善行と同様に誇りとする稀有な女性のひとりだった」Françoise Sagan, *Le Lit défait, Œuvres*, p.749.

[10] 邦訳は『熱い恋』朝吹登水子訳 新潮社 1967年.

[11] «chamade»は，「敗北を知らせるために打ち鳴らす太鼓の響き」の意味を持つ。後年サガンは「この題名には，自由を放棄すること，意志の力ではどうにもならない真新しい感情に精神も心も明け渡してしまうこと，という意味が込められている」と説明した。

[12] 恋人によって段取りされた闇の堕胎処置を逃れ，元愛人の実業家を頼って合法的かつ安全なスイスでの高額処置を受ける。

[13] Françoise Sagan, *La Chamade, Œuvres*, p.476.

[14] たとえばミシェル・フーコーは著書『性の歴史』において，「西洋近代社会は人間の性的欲望を名と財産の継承システムである婚姻に倫理的装置として組み込んだ」と理論づけたが，18世紀以降，身体の快楽は家族という形態の中でのみ開花されるべきものとなり，人間の情動面において画一主義的な姿勢がもたらされることになった。

[15]『ラ・シャマード』が発表されたのは1965年だが，フランス社会はその後M.L.F.（仏女性解放運動）による妊娠中絶と避妊の自由化運動に突入し，1975年には人工中絶が合法化される。自らの中絶経験を告白し，この運動に参加したサガンであるが，作品に描かれる主人公の姿には，父権社会の倫理的圧力や，闇中絶の危険性から解放されることの必要性が込められていると言えるだろう。

[16] フォークナー『野生の棕櫚』加島祥造訳 中公文庫 2023年 p. 440.

[17] *La Chamade, Œuvres*, p.464. ランボー詩集『地獄の季節』(1873) に収録された「錯乱II 言葉の錬金術』」からの引用詩句。

[18] *La Chamade, Œuvres*, p.487.

文献

※本短報に直接関連するものに限る。

フランソワーズ・サガンの著書

Œuvres, Robert Laffont, «Bouquins», 1993.

Bonjour tristesse, Julliard, 1954.

Un certain sourire, Julliard, 1956.

La Chamade, Julliard, 1965.

Des bleus à l'âme, Julliard, 1971.

Le Lit défait, Flammarion, 1977.

その他の著書

Bibard, Laurent, «Kojève et l'intention de Sagan», *La sagesse et le féminin*, L'Harmattan, 2005, p.258-277.

Faulkner, William, «The Wild Palms», *Novels 1936-1940*, The Library of America, 1990.

Foucault, Michel, *La Volonté de savoir. Histoire de la sexualité Ⅰ*, Gallimard, 1976.

Fouque, Antoinette, «Femmes en mouvements:hier, aujourd'hui, demain», *Le Débat*, no 59, mars-avril 1990.

Kojève, Alexandre, «Le dernier monde nouveau Françoise Sagan», *Critique*, 10e année, no 111-112, août-septembre 1956, p.702-708.

Kundera, Milan, *L'Art du roman, Œuvres*, tome II, Gallimard, « bibliothèque de la pléiade », 2011.

Lacan Jacques, *La relation d'objet. Le Séminaire, livre Ⅳ*, texte établi par Jacques-Alain Miller, Seuil, 1994.

Sartre, Jean-Paul, «L'Âge de raison», *Les Chemins de la liberté*, Gallimard, 1945.

Sartre, Jean-Paul, *L'Être et le Néant*, Gallimard, 1943.